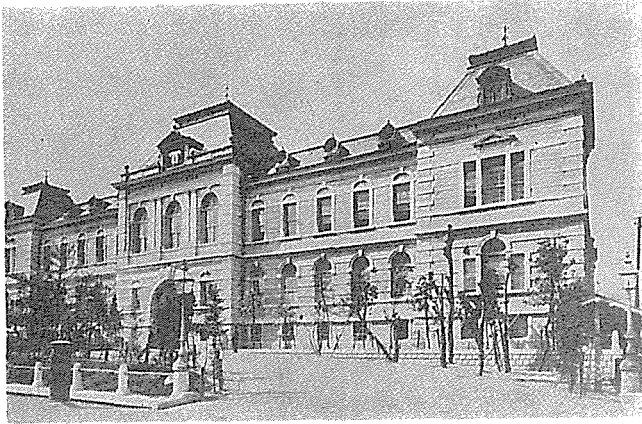


第二章 近代都市神戸の発展



明治42年落成の市役所

- 第一節 日清戦争と神戸
- 第二節 都市改造の進展
- 第三節 内地雑居問題
- 第四節 日露戦争と神戸
- 第五節 神戸の「民本主義」
- 第六節 郡制の施行と地方改良運動

第一節 日清戦争と神戸

1 戦争と市民

対外硬派と第三回総選挙

明治二十六（一八九三）年十一月末に開会された第五通常議会は、条約改正問題で解散した。いわゆる硬六派連合による現行条約勵行建議案が、自由党の支持まで得る状態になったため、十二月三十日に衆議院解散となったのである。

兵庫県第一選挙区（神戸市）は、立憲改進黨で前回敗れた鹿島秀麿が着実に準備を進めていたため、自由党は鹿島に対抗する有力候補の擁立の必要から、八部郡の武井伊右衛門と石田貫之助（第四区前代議士）のどちらかを「輸入」する案があり、解散後四日目の明治二十七年一月三日には神戸支部の協議会を開いている。協議会の結論は、どちらでもなく、立憲改進黨の鹿島と同じ仲町部（神戸と兵庫の中間地区）を根拠地とする県会議員本城安次郎を候補とした。無所属では、内海忠義（前知事）、小川鎔吉（日本郵船会社神戸支店支配人）、渡辺尚（五洲社社主）、須長清（明治移民会社社長、第二回総選挙では第五区で立候補）、小寺泰次郎、村野山人（前代議士）らを取り沙汰されていた。

自由黨員を中心に組織されていた兵神自由倶楽部は、一月五日六三人の会員で臨時總會を開き、「一の異議なく」本城を候補者として認め、運動方法を講じる森山三右衛門・高浜保蔵・今井善右衛門・河合香・中島大二・高浜治・瓜島福松・藤田松太郎の八人を委員に選んだ。運動は神戸市を四区に分け、各区に二人の事務委員を置くという、地域を基準にした方法を取ることにした（『大阪毎日新聞』明治二十七年一月七日）。

村野山人は、一月五日支持者を集めた第五議會報告会を開いた。参加した主な人物は、鹿島秀麿・井上勇吉・専崎弥五平・松本織五郎・高德藤五郎・上田栄次郎・滝本甚右衛門・山本繁造・杉山利介（市参事会員）・瀬瀧荘左衛門・藤田松太郎である。村野は、「神戸は中立の人も多く」、「前途全市の大事業たる水道問題其他市民の一致してなすべきもの多々なり」という状況説明の後、持論として「今回の総選挙に於ては前回の如く相争ふて壯士俠客の餌とならず宜しく候補者を選定し多数者を取りて平和に選挙を竣へたし」と述べると、「満場大に賛成」した。そこで第一区の「予選会」として、市参事会員・市會議員・県會議員の大集会を開き、三人の候補者を選定して、多数者を衆議院議員候補者とすることを決めた（同）。

改進黨も、五日神戸市仲町部の支持者五〇余人が会合し、満場一致で鹿島秀麿（播但鉄道株式会社取締役 資本金一〇〇万円 設立明治二十六年六月）を候補者とする決議を行った。

村野の提唱した第一区予選会は、自由党と改進黨がそれぞれ反対したため、中止になったが、中立派の市参事会員川西清兵衛・杉山利介の二人は開くための準備を続行した。

自由党は、党総理板垣退助の全国遊説を有力な戦術として採用した。兵庫県は、二月初旬に板垣らを迎えた。八日午前大阪に到着した板垣は、午後大阪府第五選挙区である豊島郡豊中村の政談演説会で演

説し、夜池田町の懇親会に臨み、九日朝池田町を出発して、午後神戸に着き、すぐさま大黒座の政談演説会で演説した。「聴衆無慮三千余名」（『大毎』同年二月十一日）の会場で、板垣は立憲改進黨や国民協会が推進した政策を非難した。彼らの進めた「官紀振肅問題、条約履行問題等悉く之れ国家の急務にあらず、唯に政府を苦しむる手段のみ」と厳しく責めた。彼ら反対党は「私怨を以て我党に対した」のである、彼らは「人智なく人を欺く一の虚言者のみ」とまで論難する。自由党は、第五議会で「地価修正、地租の改正、鉄道の布設、治水の事、航路拡張の事、水害地の補助、民業の保護奨励等人民の急務を感じる大問題」を解決するための予算審議に意を尽くそうとしていたと、力説する。板垣は、念入りに付け加える。「神戸水道補助の如きも諸君が最も急を欲せしものなるべし」と。自由党は「消極的には予算を査定し民力の休養を計り積極的には民業発達貿易移民に力を致さんとす」るのが公約であった。自由党は、日清戦争を前にして既に、地方利益を誘導するための予算政党に転換していたのである。

この演説会で、板垣は表84のような九人の候補を発表した。

板垣ら一行は、その後有馬郡三田町（第二区）から、

表 84 自由党総理板垣の発表した候補者名
〔明治27年3月第3回衆議院選挙（兵庫県）〕

選挙区	定員	立候補者名	選挙区の地域
第1区	1	本城安次郎	神戸
2	1	奥野小四郎	武庫、菟原、川辺、有馬
3	1	田 艇 吉	多紀、氷上
4	1	石田貫之助	明石、美囊、八部
5	1	未定	加古、印南
6	1	高瀬藤次郎	加東、多加、加西
7	1	未定	姫路周辺
8	2	改野 耕三 1人未定	赤穂、佐用、宍粟、揖保
9	2	桜井 勉 関 精逸	但馬
10	1	佐野 助作	淡路

資料：『大毎』明治27年2月11日

表 85 明治27年2月県会議員選挙党派別候補者(神戸市)

選挙区	定数	自由党	立憲改進黨
神戸部	2	今井善右衛門 為田喜兵衛	横田孝史 丹波謙蔵
仲町部	2	松原良太 住野斎助	高德藤五郎 糀谷慶三
兵庫部	4	岡田元太郎 神田兵右衛門 吉岡利助 川崎治平	湯野常七 加藤治郎兵衛 上田榮次郎 岸本豊太郎

資料:『大毎』明治27年2月21日

美囊郡渡瀬村(第四区)・同郡三木町(同)を回り、奈良梶井町・五条町へと向かった。

明治二十七年三月一日、第三回臨時総選挙の投票が行われた。自由党は四〇議席近く(第五議会の議席八〇を

一一九に)、立憲改進黨も六議席(同四二を四八に)を増やして、西郷従道らの国民協會が(同六六を二六に)激減したのと好対照の結果となった。第一区(神戸市)では、立憲改進黨の鹿島秀磨が本城を押えて当選した。第二区では実業派と目された村野山人、第六区では無所属の西村真太郎が当選したが、それ以外の区では、自由党五人、改進黨四人で、神戸市の鹿島と合わせると、両党五分五分となった。

自由党が対外硬運動によって勢力拡大を果したのは、十月六日開かれた兵庫県自由党大会でも確認された。会務報告で、前大会より一三〇人が増えて、県の支部党員は三三〇人となったと述べられた。支部幹事に、土居一郎・高瀬藤次郎・本城安次郎・青田朝太郎・高鍋篤郎が選ばれた。

明 治 二 十 七 年 二 月 二 十 日、県 会 選 挙 の 半 数 改 選 が 行 わ れ た。神 戸 市 で 県 会 選 挙

は、三つの選挙区・八人の県会議員をめぐる、自由党と立憲改進黨が同数の候補を立てて争った(表85)。結果は、仲町部―高德藤五郎・糀谷慶三、神戸部―横田孝史・丹波謙蔵、兵庫部―岡田元太郎・吉岡利介・岸本豊太郎・加藤治郎兵衛となった。仲町・神戸部は四人とも立憲改進黨、兵庫部は自由党と立憲改進黨で分けあったのだが、改進黨系の優位は動かなかつたのである。郡部で

は立憲改進黨Ⅱ氷上郡・赤穂郡・飾西郡・揖東郡・加西郡の各一人と揖西郡の一人、合計七人、自由党Ⅱ多紀郡二人・川辺郡・実栗郡・出石郡の各一人に揖西郡の一人、合計六人と、僅かに差がたっただけだった。従って県会全体では、自由党三四人、改進黨三三人、中立五人となり、議長・常置委員など役員選挙の難航が予想された。十三日の選挙（出席八五人）では、議長・副議長ともに改進黨が当選した。

対外硬派 神戸弁護士会（会員五一一人）は、明治二十七年五月十三日総会を開き、役員改選を行った。会頭の運動 に桜井一久、副会頭に加藤勝介を選び、その後の懇親会では「対外策として条約励行上事実の

調査を遂げんことを協議した」（『大毎』明治二十七年五月十五日）。この協議で、桜井一久・草鹿甲子太郎・岡田泰蔵の三人が委員となり、「条約励行に賛成の一方法として同地に於ける外国人の法律違反者を調査」することになった。弁護士会の多数派は硬派だったが、有志会の名でも弁護士団体がこのような調査をすることに反対する少数派も存在していた。

神戸の条約励行派は、議会閉会后、貴族院硬派の谷干城と鳥尾小弥太を招聘して、「対外問題に関する演説会」を開く準備をしていた。六月九日大阪市で開かれた対外硬派新聞雑誌記者大懇親会は、『大阪朝日新聞』の西村天囚ら全国規模の五七人が参加したが、神戸では『神戸日報』の牧山守義だけだった。

戦時下の第 四回総選挙 明治二十七年五月半ばに開会された第六特別議会は、衆議院が、条約改正をめぐって内閣彈劾上奏案を可決したため、半月後に再び解散になった。政府が解散を命じた六月二日は、同

時に清国の朝鮮への出兵に対抗する、混成一個旅団の派遣を決定した日でもあった。ここに史上最初の戦時下の総選挙が闘われることになった。

神戸では、立憲改進黨の鹿島の再立候補、自由党の本城の再挑戦が自明の戦いであり、そのほかに立憲改進黨の池長通が兵庫部の、滝本甚右衛門が葺合部の推薦で立候補が進められていた。須永清も噂があったが、「独り恐るべきは市会議長小寺泰次郎」だった。小寺の「潜勢力は一挙市中を席卷するに足るべく」で、立憲改進黨の鳩山和夫が長崎遊説の帰りに小寺を訪れ立候補を要請していた。しかし、民衆は朝鮮半島に関心を向けていたのである。「兎に角朝鮮事件の爲め選挙者の心外に馳せ思ふ様に(候補者が)熱心せず」(『大毎』明治二十七年六月二十二日)と記録されている。立憲改進黨は対外硬派演説会を各地で開催して、ナショナルリズムに燃える民衆を獲得しようとした。七月七日に姫路で開かれた対外硬派演説会には、東京から長谷場純孝や肥塚龍が来神し、神戸の鹿島秀麿や名倉次・西村真太郎らが弁士となり、「聴衆無慮七八百名」と盛会となった。鹿島には、対外硬派の代表的存在である近衛篤磨の「援助的右盤刷の書簡」が寄せられ、對抗して本城も板垣退助の書簡を支持者に配布した。投票日直前には、鹿島に「大隈伯の密書到」り、本城には自由党の大物「片岡健吉自ら出陣し諏訪山に拠つて号令」する援助があった。第二区は中立派を標榜する村野山人の当選が、直前の九月一日の新聞でも予想されていたが、二日になると「自由党候補者花木甚右衛門の勢力俄に加はり一昨夜までは村野氏の上に出づるの得票ある予算なりしと云ふ」(『大毎』同九月二日)と自由党の善戦が伝えられるように激変した。

第四回臨時総選挙は、七月三十日の公示によって、九月一日に執行された。各党の当選者数は、自由党(第三回一一九↓第四回一〇六)、立憲改進黨(四八↓四五)、国民協会(二六↓三〇)、立憲革新党(三七↓四〇)と、若干の増減はあったが、勢力比にさほどの変化はなかった。兵庫県では、第一区鹿島秀麿(立憲改進黨)が本城

と三三票差、第二区花本甚右衛門（自由党）は村野と四八〇票差、第三区田艇吉（自由党）も次点と七二票差など接戦もみられたが、全一〇区一二議席は自由党八、立憲改進黨四となり、自由党の善戦が目立った。

戦争と市民

明治二十七年八月一日明治天皇の名で宣戦が布告された。新聞では「宣戦の大詔一たび降るや神戸の民心も亦数層感激し軍費を献納する者多く」と、神戸市でも日清戦争の始まりに興奮する民衆の姿が記録されている。「国私立銀行会社員等」は東京の福沢諭吉・渋沢栄一らの呼びかけに応え、「県官警官其他官庁官吏」は別個に四日までに五〇〇余円集め、その後の献金も含めて陸軍と海軍に各々三四四円八八銭を七どころ送った。神戸市吏員は俸給の二%を陸軍恤兵部に献納すると決めた。一日から四日までには兵庫県庁に届いた恤兵献金は四〇〇〇円にもなり、清酒やハンカチ等の品物も寄せられた。

マスコミも積極的だった。『神戸又新日報』は、「遠征軍隊慰勞拠金」を呼びかけ、四日までに一度朝鮮に送り、その後の分だけで三〇〇〇円以上になった。九月末には五四四二円八九銭二厘になった。『大阪毎日』（明治二十七年八月八日）は、華族や「巨商大農」など「財に饒か」で「常に国家の擁護と人民の尊崇を受くるもの」は、「斯かる有事の時に当て豈に奮発一番大に資財を抛つて以て奉公の誠を表せざる可けんや」と献金を勧める社説「大に軍資を抛出すべし」を掲げた。

八月九日実業家の軍資献金についてはじめての会合がもたれた。山本亀太郎・九鬼隆輝・川崎正蔵・光村利藻・小寺泰次郎・池田貫兵衛・小曾根喜一郎・川西清兵衛らに周布県知事が加わった。

彼らは十一日に再び集まり、神戸市での献金目標を一六万円と定めた。主唱者惣代を鳴滝幸恭とする「兵庫県報国義会」の発起人会は、九月三日開かれ、既に五〇余人の会員を得たことが報告された。鳴滝が二五

人の委員を指名し、互選で鳴滝・小曾根喜一郎・渡辺尚の三人が専務委員になった。事務所は神戸商業会議所に置かれた。報国義会に軍事公債を申し込んだ額は、十日に二万七六〇〇円、十一日に二万七〇〇〇円だった。十一日では、一万円以上が六人、五〇〇〇円以下一〇〇〇円以上は三十六人だった。一万円以上は、光村利藻七万円・小曾根喜一郎五万円、九鬼隆輝・渡辺尚・沢田清兵衛・沢野定七各一万円。十日から十三日までの分をあわせて一九八万三三〇〇円になった。日清戦争の軍事公債応募は、国民が熱狂的に支持し、締め切り日の九月十三日午前までで三〇〇〇万円の予定額に、六三三二万四七〇〇円と二倍の応募が集計された。公債応募事業が成功裏に終わると、「兵庫県報国義会」は九月二十九日から「新聞に広告して大に軍資献納金募集に着手」(『大毎』同九月二十九日)した。十一月末までの第一回募集では、二三一七円も寄せられ、折半して陸海軍に献納された。引き続き取り組んだ軍事公債第二回募集では、総額六一万九七五〇円になった。川崎正蔵一〇万円、渡辺尚一万円、宮崎儀一四〇〇〇円がベストスリーだが、六〇七円層が最も多く、八円と五円がそれに続いているから、市民の中層が応募の中心だったと推定される。

神戸地域の教育衛生・農工商業者の団体である神戸三交協会(会員二三五人)も軍資金・恤兵金の寄付を決め、役員の直木政之介・小野権四郎・高德藤五郎・梶谷慶造・上松忠平・友成徳次郎らがまず五〇円から一〇円を寄付し、九月末までに一七二〇円にもなった。

多聞通の実業団体盈進会も献金を決め、幹事鈴木侃次郎(開業医)が中心となった。神戸港の舩船営業者総代(上野善吉)も、八月二十一日各五〇〇円を陸軍・海軍に献納した。

十月十二日、神戸市長・神戸市参事会員・神戸市徴兵参事会員らが呼びかけて、「徴集兵士の旅費贈与、



写真 21 日清戦争凱旋祝賀の門

従軍兵士の家族補助を計らんため」(『大毎』同十月十三日)、神戸尚武会の発起人会が開かれた。十一月月上旬までに「千二百余名」の応募者があったので、十一月七日市役所で委員会を開き、役員選挙を行う大会の準備を始めた。

十一月八日、「本会の目的は征清軍の終局に至るまで婦人応分の義務を尽さんが為め広く会員を募集し協同して事を為すにあり」(『大毎』同十一月十日)とする「神戸婦人報公会」が設立された。会長に周布貞子(知事夫人)のほか鈴木うめ子・小曾根しげ子・九鬼よし子・市田ひさ子ら二五人の委員を選んだ。十二月末までに一八〇〇余人の会員を組織している。十一月の収入金は二九九円余と少ないが、この会による毛糸製帽子五〇〇〇個の贈呈が、神戸女学院生徒の同じく一五〇個寄付を連動させるなど市民の間に戦争支援熱を高めるのに大きな役割を果たしていた。この会は、第二回寄贈品も帽子一〇一〇個で、第三回も同じだと報じられている。

十二月八日最初の「戦勝祝賀会」が湊川堤上を会場として開かれた。準備会は、「十五歳以上の男子」「会費二十銭」など参加条件を決めたが、三五〇〇余人の参加のほか、数万人の見物人も加わって「湊川両堤防は恰も人の山を築」いたようだった。参加者は生田神社・湊川神社・兵庫尋常小学校の三カ所に分散集合し

て、軍楽隊を先頭に会場に向かい、周布知事が祝文を朗読し、「大元帥陛下万歳海陸軍万歳」を三唱して祝杯を挙げた。周布の祝文は、成徳・平壤・豊島・九連鳳凰・金州・旅順の戦いを賛美し、「惟ふに北京を陥れ城下の盟を為さしむるも亦遠きにあらざるべし、豈人生の一大快事ならずや」(『大毎』同十二月十一日)と北京攻略までも期待していた。アトラクションも、北京城を仮設し、模擬的分捕り大砲で総攻撃し、災上するのを見て「凱歌を挙げ」というセンセーションも、北京城を構成されていた。この頃各地で開かれていた「戦勝祝賀会」はいずれも北京攻略を求めており、国民の戦争熱拡大が確認できる。

戦勝祝賀会は、威海衛占領を記念して明治二十八年二月十五日にも行われた。午後六時から湊川神社で行われた会には、四〇〇〇余人が参加し、「隊伍を組み新作の唱歌をうたひつつ静々として練出しぬ」と市内を一〇時過ぎまでパレードした。

2 戦争と経済

貿易の不調

日清戦争開始前の六月から七月には、神戸港の朝鮮・中国貿易は「滅切不振めつきふぜん」となった。将来の不安から「思惑仕込の如きは丸で途絶」となったからである。神戸の代表的産業であるマッチ産業も青息吐息の有り様だった。銀貨が暴落したため、原料である塩酸カリ(二樽¹―一二斤)が暴騰した。明治二十五年の一九円が明治二十七年には四〇円余になったのである。その他パラフィン、赤燐、亜鉛等も四〇〜五〇%上昇した。中国、ボンベイ、カルカッタ、シンガポールなどへの輸出も「益々不振の状況

を呈し」ていた。明治二十七年に製造者は大阪三八軒、神戸三五軒あったが、彼らは三月十三日神戸の燐寸連合会事務所で、営業短縮の申し合せを行った。四月末には、休業が七〇八軒、破産寸前が二軒、大手でも一〇日に二日（一日と六日で、一六と称する）休業しようやく維持していると言われるような有り様となった。そのうえ、軸木が清国に輸出され、国内で品薄になったため、「輸出防遏的課税」を大蔵省に請願したが、却下されたため、再度調査のうえ大蔵省と交渉が進められた。さまざまな面で清国と衝突していたのである。七月には、大阪・神戸のマッチ業者七〇余人は、前田正名を神戸商業会議所に招き、不況対策を相談した。会合は、前田の意見で六人の委員（神戸は滝川弁三・本多義知・黒原好二）を選び、委員は大阪・東京の同業者と更に相談して全国団体組織化のために動き始めた。七月十一日には神戸港のマッチ業者の総会を開き、委員の報告と同盟休業を討議した。九月三日京都で全国燐寸業者大会が開かれ、東京に本部を置く日本燐寸義会を結成した。

日清戦争の勃発か否かにかかわらず、清国への輸出拡大のチャンスと見た本城安次郎・岡田元太郎・竹内綱・寺田寛ほか七人は、七月初旬日本水産販売株式会社の創立事務所を、兵庫水産会社に設けた。資本金は三〇万円で、「徹々たる」実績しかない神戸港の水産物貿易に着目したのだが、目当ては「清国地方へ販路を広め」ることだった。

3 ハワイ移民

移民会社 日本がハワイ国王の求めに応じて、「官約移民」と称する農業移民斡旋を開始したのは、明治の続出 十八（一八八五）年だった（布哇日系人連合協会発行『ハワイ日本人移民史』）。年々農業移民が増加し

ため、二十四年に「官約移民」は打ち切られ、同年四月移民保護規則が公布された。それに基づいて、三十年までに七つの移民会社が設立されたが、その最初ともいえるべきものが、神戸市元町二丁目五八八番地に事務所を置いた神戸渡航合資会社である。神戸市の今井太左衛門・吉川藤五郎・江波戸幸太郎の三人が発起人で、資本金は一万五〇〇〇円だった。続いて、「大阪神戸の紳商が資本金百万円を以て神戸に一大移民会社を起すべし」と注目されたのは日本明治移民会社である。これには田中市兵衛・大庭竹四郎・阿部彦太郎・金沢仁兵衛などの実業家以外にも、篠崎五郎（非職新潟県知事）・山口英之（もと明治移民会社社長）も加わりうとしていた。膨大な資本金は、「メキシコ及米国にて地所を買入れて出稼せしめんとの大仕掛による」（『大毎』明治二十四年四月二十三日）と説明されていた。これは、実は明治移民会社として営業していたものを、田中らが全面委譲され、移民保護規則に基づいて新しく出発するものだった。神戸居留地で営業していたサミュエル・サミュエル商会やアプトンらは一切手を引き、「以後は日本人の手のみにて経営する目的」で、社長も大家七平が就任する予定とされた。ただし、大家は六月十日の『大阪毎日新聞』に「該会社ニ毫モ関係コレ無ク候」との広告を出している。五月十四日、移民と会社の契約書案が周布知事の認可を得たため、十五日か

ら開業した。専務取締役には、後藤勝造が指名され、事務所も栄町三丁目に移転した。移民保護規則によって、兵庫県は移民取扱手続方を施行した。これは、保証人として、神戸市居住の地租一五円以上または所得税一五円以上納入者をあげ、願書を提出することとしたもので、「従来に比すれば保証人に一層重きを置いたものとなった。第一回移民は、六月九日に出発する広島・熊本・山口三県の二〇〇余人だった。彼らは農業移民で、ハワイの参米支店支配人加藤秀平が業務を担当した。この移民から会社は一人七円の手数料を取る契約になっていた。六月には移民地はハワイなどに限定され、現地の代理人は恒川雅言のほか、板野与左衛門・常支節・真島顕藏・柏木幸之介・後藤鉄次郎・今井佐平・尾木克博とされた。七月十八日には吉佐移民会社神戸出張所(所長寺田一郎は元神戸郵便電信局長)も渡航出張に関する代理人を申請した。神戸には三つの移民会社が活発に活動していたのである(この節は『大阪毎日新聞』によるとが多い)。